

クリ主要品種の毬（イガ）落ち性評価と機械収穫適性の評価基準	
【要約】クリの主要品種について、イガの中に果実が入ったまま落下するイガ落ち性には品種間差があり、‘えな宝来’、‘ぼろたん’はイガ落ち率が高い。また、イガ剥き機による剥毬率とイガ落ち率の積にも差があり、機械収穫適性の評価基準になりうる。	
中山間農業研究所 中津川支所	【連絡先】 0573-72-2711

【背景・ねらい】

クリ栽培における収穫作業の省力化に向け、自走式収穫機（バーディーマロンピッカー（BX800/M8-MP750）：オーレック）やイガ剥き機（イガ剥き機 CBH2A／共立）が市販化され、県下クリ産地でもその活用が期待されている。自走式収穫機の回収率は、果実よりイガの方が高いことから、収穫機の性能をより効率的に発揮するためには、イガの中に果実が入ったまま落果するイガ落ち性の品種が望ましい。そこで、県内の主要品種についてイガ落ち性ならびにイガ剥き機を使用した場合の剥毬率を調査し、機械収穫適性の評価基準を策定する。

【成果の内容・特徴】

- 1 落下したイガおよび果実について、イガから 1 果以上の果実が出ているものを「実落ち」、果実が全く出ていないものを「イガ落ち」としてカウントし、それらをイガの和で除してイガ落ち率および実落ち率を算出したところ、‘えな宝来’、‘ぼろたん’はイガ落ち率が高く、‘えな宝来’、‘利平ぐり’は実落ち率が高い（図 1、表 1）。
- 2 2 か年の調査において、‘丹沢’はイガ落ち率に 40%以上の差があり年次変動が大きい（表 1）。
- 3 果実が全く出ていないイガ落ちした毬果を、イガ剥き機に投入しイガと果実をすべて分離できたものをカウントして剥毬率を算出したところ、全ての品種が 85%以上であった（表 1）。
- 4 自走式収穫機はイガのほうが高回収率が高く（データ省略）、イガ剥き機による剥毬率が高い方が効率、歩留まりが良いことから、イガ落ち率と剥毬率の積を算出し、機械収穫適性として、0.8 以上を「高」、0.5 以上 0.8 未満を「中」、0.5 未満を「低」として評価したところ、‘丹沢’、‘えな宝来’、‘美玖里’、‘ぼろたん’、‘筑波’の順に高い（表 2）。
- 5 以上のことから、イガ落ち性および剥毬率とイガ落ち率の積には、品種ごとに差がみられ、機械収穫適性の評価基準になりうると考えられた。

【成果の活用・留意点】

- 1 機械収穫適性は、イガ落ち率と剥毬率から判定しており、実際の自走式収穫機によるイガ及び果実の回収率を評価したものではない。
- 2 雨水によりイガが重くなり、降水時は本来より早く落下している可能性があったが、気温や降水量とイガ落ち性との相関性は確認されていない。

【具体的データ】



図1 ‘えな宝来’のイガと果実の様子（A：イガ落ち、B：実落ち）

表1 品種の違いとイガ落ち率及び剥毬率

品種	イガ落ち率（％）				剥毬率（％）			
	2024 年		2025 年		2024 年		2025 年	
	調査イガ数（個）	イガ落ち率	調査イガ数（個）	イガ落ち率	調査イガ数（個）	剥毬率	調査イガ数（個）	剥毬率
えな宝来	882	74	1,046	75	－ ^z	－	238	85
丹沢	524	31	518	78	－	－	155	96
ぼろたん	303	89	329	62	48	100	247	100
えな宝月	660	23	390	47	58	100	34	100
筑波	550	67	436	53	85	100	58	100
利平ぐり	1,074	42	695	24	94	100	40	100
美玖里	295	71	435	64	372	94	58	99

^z 未調査

表2 品種ごとの機械収穫適性評価

品種	機械収穫適性 ^z	
	2025 年	2024 年
えな宝来	○ [0.64]	－
丹沢	○ [0.75]	－
ぼろたん	○ [0.62]	◎ [0.89]
えな宝月	△ [0.47]	△ [0.23]
筑波	○ [0.53]	○ [0.67]
利平ぐり	△ [0.24]	△ [0.42]
美玖里	○ [0.63]	○ [0.67]

^z 機械収穫適性：◎（高）：0.8 以上、○（中）：0.5 以上 0.8 未満、△（低）：0.5 未満
括弧内はイガ落ち率と剥毬率の積を示す

研究課題名：【食料安全保障強化に向けた革新的新品種開発プロジェクト】スマート技術向けの特性を持つ果樹品種の開発（令和6～7年度）

研究担当者：メルトン里奈、熊澤良介、水野文敬